

山形大教育 ○金子幸子・佐藤慶子

桜の聖母短大 長沢由喜子

目的 最近の若者における衛生観念の変化は、例えばモーニングシャンプーの習慣化に顕著に認められるように、住まいにおける衛生空間に対する住要求にも少なからぬ影響を及ぼすに至っている。本研究はこの現象に着目し、特に中学生を取り上げ、住まいおよび住行為の実態と衛生空間に関する意識とのかかわりを明らかにしようとするものである。

方法 山形市内S中（市街地）同J中（郊外新興住宅地）福島県T中（郡部）の男女生徒計549名を対象とし、衛生空間として浴室・便所・洗面所を取り上げ、それぞれについて実態および評価さらに各空間を構成する要素およびそれらにかかわる条件の重要度に関する調査を実施した。（自記式質問紙による）調査期日は昭和62年11月である。

結果 浴室の実態については広さ・燃料および自分が浴室掃除を分担する割合などにおいて市域と郡部とに相違がみられる。入浴回数は市域・郡部間に差なく女子93%男子78%が毎日と回答しており、洗髪頻度については毎日が全体の62%を占め、とりわけJ中女子の95%に対してT中では男女共40%台を示す事実に着目できる。浴室の評価は全体に女子の不満が高く、とりわけ給湯設備に対する指摘が目立つ。重要な条件としては空間の保温性・床の安全性に対する評価が高くなっている。便所についてはJ中の55%を最高に郡部T中でも34%が洋式であり、全体の半数が洋式を理想としており、ホテル式のバス・トイレ一体型に対する拒否率は52%である。洗面所については所有率75%であり、給湯設備の充実が満足度と結びつくことが明らかである。さらに朝の洗髪習慣化を反映し、洗面所に広さと給湯設備を望む割合が市域において半数を超える事実に着目できる。